覆水盆ボヤージュ

伊藤貴晴　作

【登場人物】

私

【０】

私、登場。周りは暗い。

私 え、暗い。暗くない？　ちょっと暗いんで、明るくしてもらえませんか？

少し明るくなる。

私 あ、ちょっとだけ明るくなった。え、もっと明るくしてほしい

もっと明るくなる。

私 お、すごい。じゃあ、変な照明にしてください

変な照明になる。

私 お、すごい。すごい変。うん、普通のでいいや。普通のにしてください

普通の照明になる。

【１】

私 はい。えー、では、こんにちは。私です。ではこれから、私が見た夢の話をします。私、いろんな本を読むんですけど、読んだ本の内容が夢に出てきたりするんです。この間は、草原で、草が生えてて、木も生えてて、木の下で本を読んでて、そしたら兎が走って行って、あ、でも普通の兎じゃなくて、二本足で歩いて喋る兎で、その兎を追いかけて行って、森に入って、穴が開いてて、落ちて、うそーんって思って、ずーっと落ちてくんだけど全然下に着かないっていう、『不思議の国のアリス』〔※１〕っていう本を読んでる夢を見ました。それから、朝起きたら変な虫になってるっていう『変身』〔※２〕っていう本を読んでる夢を見たり、李徴が虎になるっていう『山月記』〔※３〕っていう本を読んでる夢を見たりしました。何か、本を読んでる夢を見ちゃうんですよ。小説の中で小説を書いてたり、映画の中で映画を撮ってたり、夢の中で夢を見たり、思春期ってそういうメタフィクションっぽいのが好きですよね。私、思春期です。あ、それから、夏目漱石の『夢十夜』〔※４〕の夢を見ました。

【２】

私 こんな夢を見た。男が腕組をして枕元にすわっていると、あお向きに寝た女が、静かな声でもう死にますと言う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかなうりざね顔をその中に横たえている。真っ白なほおの底に温かい血の色がほどよくさして、唇の色はむろん赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますとはっきり言った。男も確かにこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上からのぞき込むようにして男が聞いた。死にますとも、と言いながら、女はぱっちりと眼を開けた。大きな潤いのある眼で、長いまつげに包まれた中は、ただ一面に真っ黒であった。その真っ黒なひとみの奥に、男の姿が鮮かに浮かんでいる。

【３】

私 これは本を読んでる夢じゃなくて、実際にその場面が見えるんだけど、私は登場人物じゃなくて、ずっと上の方から男と女を見ていた。夏目漱石の『夢十夜』は国語の授業で読んで、気になったから図書館で本を借りて続きを読んだ。そしたら変な話がたくさんあった。第二夜だと侍が悟りを開こうとしてるんだけど、雑念だらけでどうしようもないし、出てくる和尚も性格悪い。第三夜に出てくる子供はおっさんみたいな喋り方でかなり怖い。第四夜で手拭いを蛇にしようとしてるお爺さんはちょっとかわいい。それから先は半分寝ながら読んでたからあんまり覚えてない

【４】

私 本はよく読むんだけど、国語は得意じゃなくて、ことわざをよく間違えます。たとえば、えっと、「他山の石の上に三年」。「塞翁が馬の耳に念仏」。「窮鼠猫を噛み、飼い犬は手を噛まれる」。「鬼の目にも金棒、犬も歩けば金棒」。水に関することわざはいろいろある。「井の中の蛙飛び込む水の音」。松尾芭蕉〔※５〕。「河童の川の流れのように」。美空ひばり〔※６〕。「愛のままにわがままに僕は君だけを傷つけない」〔※７〕。B'z。あ、これ水と関係ないや。「寝耳に水、寝耳み耳み耳みみず」。スモモも桃も桃のうち、みたいな。朝起きたら耳にみみずがいてびっくり。「覆水盆ボヤージュ」。お盆にたまった水をこぼしちゃうんだけど、水は地面に浸み込んで湧き出て川になって流れて

美空ひばり「川の流れのように」を歌う。

私 海に着いて蒸発して雲になって雨になって再び元の場所に戻ってくるの。こうして水は旅をしてるっていうお話。ボンボヤージュはフランス語で「よい旅を」っていう意味

【５】

私 というわけで、私は夢の中で水になる。「月日は百代の過客にして行き交う年もまた旅人なり」〔※８〕と言ったのは松尾芭蕉で、西行だって李白だって旅をしてたっていう話だし。祇園精舎の鐘の音〔※９〕がしたら法隆寺で柿でも食べて〔※10〕、「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。」〔※11〕っていう方丈記の仏教的無常観にどっぷり浸かって流されていこうっていう感じ

私 水に関するジョークで昔流行ったのがあって、水について否定的なことを言って、危険な物質だと思わせるっていうのを聞いたことがある。たとえばこんな感じ。１、私は水酸と呼ばれ、酸性雨の主成分である。２、私はやけどの原因となりうる。３、私は多くの材料を腐らせ、さび付かせる。４、私は電気事故の原因となり、自動車のブレーキの効果を低下させる。５、私は地面を削り、地形を変えてしまう。６、私は人を窒息させ、命を奪うことができる

【６】

私 「もう死にます」

私 「でも、死ぬんですもの、仕方がないわ」

私 「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片（かけ）を墓標（はかじるし）に置いて下さい。そうして墓のそばに待っていて下さい。また会いに来ますから」

私 「百年待っていて下さい」

私 「百年、わたくしの墓のそばにすわって待っていて下さい。きっと会いに来ますから」

私 そして私は百年の後、はるかの上から百合の花に落ちる露になった

【７】

私 こんな夢を見た。私は水となって世界を旅する存在となった。川になって、海になって、蒸発して、雲になって、雨になって、川になって、海になって、蒸発して。雨垂れ岩を穿つ。雫となって大地に穴を開け、洪水となって家をなぎ倒し、揖斐川の水となり、太平洋の一部となり、南極の氷となり、タピオカドリンクやかき氷となってインスタグラムを飾る。私は水となって世界を旅する。ただし、同じ場所には二度と戻らない。

私は歌う。

music by 笹川美和「ならば」

私 大好きな人がいた。私はあなたに降りかかる雨の雫であり、あなたを包み込む霧であり、あなたの汚れを洗い流すシャワーである。私はあなたに忍び込むことにした。ウォータークーラーの水となり、コーヒーや味噌汁となり、南アルプスの天然水となり、あなたに忍び込み、あなたの血となり、汗となり、瞳から流れる涙となった。

終わり。

【参考】

※１ 『不思議の国のアリス』はルイス・キャロルの小説。

※２ 『変身』はフランツ・カフカの小説。

※３ 『山月記』は中島敦の小説。

※４ 『夢十夜』は夏目漱石の小説。

※５ 「古池や蛙飛びこむ水の音」は松尾芭蕉の発句。

※６ 「川の流れのように」は美空ひばりの楽曲。

※７ 「愛のままにわがままに僕は君だけを傷つけない」はB'zの楽曲。

※８ 「月日は百代の過客にして行き交う年もまた旅人なり」は松尾芭蕉の紀行文『奥の細道』の冒頭文。

※９ 「祇園精舎の鐘の声」は『平家物語』の冒頭文。

※10 「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」は正岡子規の俳句。

※11 「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。」は『方丈記』の冒頭文。